



お目当ての熱々のはつとを味わう来場者

登米市の郷土料理として親しまれている「はつと」をよりに多くの人を知ってもらおうと、第8回日本一はつとフェスティバル（同実行委員会主催）が12月4日、中江中央公園で開催され、家族連れなど約2万人がはつとを堪能しようとお訪れました。

当日は、登米春蘭太鼓の威勢のよい演奏や新田婦人会の皆さんによるはつと踊りが行われ「はつとフェスティバル」

# 大賞に「しお野菜はつと」

## 第8回日本一はつとフェスティバル

がスタート。各店舗ごとに「あずきはつと」や「油麩入りはつと」などの定番のはつとに加え、「韓国風はつと」や「カレーはつと」「イタリアンはつと」など、味や食材に工夫を凝らしたはつとが数多く販売され、訪れた人たちはお目当てのテントに並び熱々のはつとを楽しみました。

野外ステージでは、地元よさこい団体による演舞や清水バンドのライブなどが行われ観客を魅了しました。

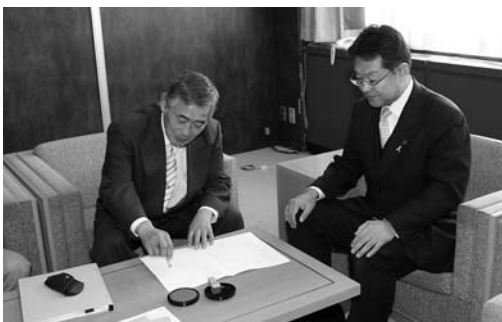
また、昨年に引き続き来場者が食べておいしいと思っただつとに、割りばしを投票する「はつと大賞」を実施。数多くの投票の結果、今年のはつと大賞には、ラーメン厨房丈や（迫）の「しお野菜はつと」、準大賞には伊豆沼農産（迫）の「赤豚のカレーはつと」、第3位には農家レストランはつと亭（石越）の「あずきはつと」がそれぞれ選ばれました。



むすび丸も登場し、会場を盛り上げました



はつとを3杯食べると抽選できる抽選会も大人気



市と天形ゆいっこの会で覚書に署名・捺印をしました

市役所迫庁舎において12月12日、道路環境づくりに取り組む「とめゆいっこサポーター」認定証の交付式が行われ、市内初の認定団体となる、迫町の天形ゆいっこの会（代表千葉徳郎さん）へ、市長か

## 道路の美化に相互に協力

とめゆいっこサポーター「天形ゆいっこの会」認定式



認定証を受ける千葉代表（中央）と門田副代表（左）

ら認定証が交付されました。これは、道路の美化活動などを行うボランティア団体を市が支援する仕組みで、具体的には団体をサポーターとして認定し、市民活動総合補償制度での対応や表示板の設置などを市が行い、団体は除草や清掃作業、回収したごみの処分などに協力するものです。今回認定を受けた「天形ゆいっこの会」の活動区間は、市道長沼ダム湖周線の兵糧山公園出入口付近の道路と公園で、認定式後、千葉代表は「認定前から地域で美化活動を行ってききましたが、今回の認定を受け、さらに活動の輪を広げ地域貢献をしたいと思っております」と今後の活動への意欲を述べました。



早期完成を願い、関係者による鍬入れが行われました

## 復興道路の早期開通を

三陸縦貫自動車道 登米志津川道路で着工式

東日本大震災に関する復興計画の効果を高める先進的な取り組みの一つである「復興道路」として位置付けられている、三陸縦貫自動車道登米志津川道路（16・1km）の着工式が11月19日、南三陸町志

津川字入谷地内の志津川トンネル南三陸町坑口付近で開催されました。

式典には、津島国土交通大臣政務官や村井宮城県知事、関係市町の首長など約100人が出席。始めに震災の犠牲者の冥福を祈り全員で黙祷を捧げました。

式典のあいさつで村井宮城県知事は「震災で三陸道は「命の道」として重要な役割を果たしました。復興に向けて1日も早い全線開通に全力で取り組みたい」と三陸道の早期完成に対する意気込みを述べました。その後、「命の道」である三陸道の1日も早い全線開通に向けて、関係者が鍬入れを行いました。

また、式典では震災6日前に完成した釜石山田道路によって津波から奇跡的に生還した釜石市内の小・中学生が当日の体験を紹介したビデオレターの上映のほか、沿線市町村が高規格道路の重要性を全国に訴えようと作成した「命の道バッジ」が地元の児童から来賓に贈呈されました。

志津川トンネルは延長1・4km。三陸縦貫自動車道登米志津川道路は現在、登米ICから登米東ICの5kmが開通しています。



市長の号砲で、登録者・一般ハーフの部がスタート

## 日々鍛えた健脚を競い合う

### 第26回カップハーフマラソン

第26回カップハーフマラソンが11月27日、登米、中田両地区にわたる「カップハーフマラソン公認コース」で開催されました。

開会式では市長が「皆さん一人一人の自己記録更新を目指し、頑張ってください。また、向かいの会場では産業まつりも開催されていますので、登米の恵みも合わせて堪能してください」と参加者を激励しました。

大会当日は、午前9時30分に市長の号砲とともに登録者・一般のハーフ（21・0975km）がスタート。参加した皆さんは、それぞれ自己ベストの更新を目指しながらゴールを目指しました。

沿道では、コースを駆け抜ける選手たちに、集まった観衆やチームメイトなどから「ファイト!」「頑張れ!」と盛んな声援が送られました。レース後は、仲間同士で今日のタイムを確認しあったり、産業まつりの会場を巡り旬の登米の食材を買い求めたりしていました。

カップハーフマラソンへの参加者は年々増えていて、今年も県内外から2683人がエントリー。参加した選手は8種目30部門で健脚を競い、力強い走りの公認ハーフの部から、ほほえましい親子ペアの部まで、それぞれの部門で沿道の観衆を楽しませていました。



選手や応援者なども数多く訪れたとよま産業まつり



多くのボランティアの皆さんが受付などを協力